

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング617号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (3212) 4007・1480
Fax (3212) 1447
編集責任者 岡 沢 美
印刷所 関東図書株式会社
定価200円(年間購読料参千円)
1991年4月25日発行
第23巻第4号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.23 No.4

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.617, Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

スウェーデンと日本

Sweden and Japan

理事 慶応義塾大学教授 丸尾直美

Director, Prof. Naomi Maruo

スウェーデンと私の縁は、1963年に北欧三国の労働者教育協会のご好意で、北欧を訪れたときに始まる。そのとき、スウェーデンの普遍主義的な社会保障、ケインズの雇用政策に労働市場政策を組み合わせた積極的雇用政策、まだできたばかりのファッションなどのニュータウンと都市計画、などをみて、強いカルチュラル・ショックを受けたのが、私のスウェーデン研究の契機であった。以来、15回以上、スウェーデンを訪れ、スウェーデンの経済政策、福祉政策、環境政策等を調査し、日本に紹介する機会を得た。スウェーデンの政策は日本にははかり知れない影響を与えてきた。老人と障害者に対する福祉サービスはいつも注目されてきた。1970年のはじめにスウェーデン政府の御招待を受けてスウェーデンを訪問したときには、マルメ市にできたサービス・ハウジングの先進性に感銘し、毎日エコノミストや「脱GNP時代」という拙著で紹介した。その後、スウェーデンの福祉政策は更に発展し、今ではサービス・ハウジングもつくられなくなり、在宅サービスを重視するようになったが、ノーマライゼーションの理念に基づく北欧型の福祉サービスの日本への影響は今も強い。年金ではスウェーデンの二階建公的年金制度が日本の年金改革のモデルとされた。最近では、出生率低下に直面して、スウェーデンの生産休暇や介護休暇、児童手当制への関心が高まっている。労使関係では経営参加と労働環境人間化が注視され、雇用政策では、労働市場の質的ミスマッチを調整する労働市場政策が日本でも最近重

視されるようになった。都市計画と環境政策でもスウェーデンが再び注目されている。

一方、福祉国家に批判的な人びとは、スウェーデンの経済が好調のときは沈黙するが、不調になると勢いづいて福祉病「スウェーデン病」の危険を訴える。1980年代後半のスウェーデン経済は好調で、スタグフレーションと財政赤字と国際収支の赤字を克服したが、昨年初来、スウェーデン経済は停滞し、しかもインフレ率が10%を越して再び、経済的困難に直面し、賃上げ抑制や税制改革で困難を克服しようとしている。スウェーデンが福祉国家のジレンマと経済民主主義のジレンマを内包していることは否定できないが、スウェーデンがこうしたジレンマを超える政策と新たなシステム改革を行ない、現在の困難を克服することを期待したい。

目次

スウェーデンと日本……………丸尾直美…1
スウェーデン王立科学アカデミーで講演して ……………中嶋博…2
ONSDAG=WEDNESDAY
……………坂田仁…3
スウェーデン大使館竣工……………5
研究会報告(武田龍夫)……………5
SIPニュース……………5

スウェーデン王立科学アカデミーで講演して

Delivered a Lecture at the Royal Swedish Academy of Sciences

顧問 早稲田大学教授 中嶋 博
Adviser Prof. Hiroshi Nakajima

T・フセーン教授のご推挙で

去る12月下旬、北海道に出張中に、スウェーデン王立科学アカデミー (Kungl. Vetenskapssakademien) 事務総長 Prof. Carl-Olof Jacobson より Fax があり、来たる3月来瑞の由 Prof. Torsten Husén より聞いたが、13日午後6時半より、‘日本における高等教育と研究—現状と課題—’について講演をしてもらいたいとの招請状が送られてきており、春季プログラム印刷の都合上、講演の要旨を大至急送ってもらいたいとの付言があった。

1 昨年秋、当研究所と関係の深いフセーン教授が国際高等教育会議出席で来日された際、是非近いうちに自分も会員であるアカデミーで話をしてもらいたいとの依頼は受けてはいたが、突然返事を求められ、有難いやら、これは大変なことだと1晩熟考の末次の要旨をファックスで送った。

講演の概要

本講演は、日本における高等教育と研究の現状と課題について、比較・国際的展望、とりわけスウェーデンに言及しながら明らかにしようとするものである。日本の高等教育と研究の長所と考えられるものの中には、すべての人が教育を利用出来、私立大学の積極的役割、筑波大学の独特な学際的研究、私企業内研究がある。また短所と考えられるものには、有名大学進学への熾烈な競争、成人の高等教育進学機会の欠如、国際的共同研究プロジェクトへの支援の不十分、人文・社会科学への研究費配分の少なさがある。資料は各種報告書や白書、さらに中教審、大学審議会、科学技術審議会、OECDのような国際機関等の近時の勧告を参照する予定である、と。

日本の弱点こそ学びたい点

シルヤ・ラインで凍るバルト海を予定通りストックホルムに3月10日(日)着き、旅装をといたところにフセーン教授が電話下され、明朝大学に来るよりにとのこと。そして草稿を丁寧に見られ、いくつかの箇所細かい表現上の修正をされ、さらに午後にはアカデミー講演会場のチェックにご案内いただいた。

さて3月13日(水)午後6時半よりの例会で事業報告と学術奨励賞の授与(3人であったか4人であったか分からないほど緊張していた)があり、

講演は45分より女性で副院長の Prof. Kerstin Lindahl-Kiessling (ウップサラ大) の司会により行われた。

大体の要旨はさきに述べた通りであるが、フセーン教授のかねてからの指示でスライドを併用し、説明をより明瞭にした。例えば早稲田大学人間科学部入口の大きなカール・ミレスの手になる天翔ける彫塑には感歎の声が上がった。また当研究所および日瑞基金のことにふれると共に、アカデミーと協定を締結している日本学術振興会の日瑞研究者交流の実態も詳述した。

45分ということで、7時半きっかりで打切り質問に入った。いくつもの質問を受けたが、その大半は、日本で問題にされている受験競争こそ卓越を育てるものであり、学生の年齢は日本のように若いほうが良いといった内容のもので、大いに考えさせられた。さて討論が白熱し、少々困ったなと感じた時、フセーン教授が発言を求められ、いろいろの見解はあろうが中嶋の指摘は正しいとされ、恐縮した。

忘れ難い夕食会

演壇を降りると共に、‘ブラボー’ ‘エクセレント’ と次々に握手を求められ、一瞬ボーッとしてみると ‘ダーゲンス・ニィヘーテル’ 紙記者とのインタビュー。そこへ副院長。‘さあ、夕食会へ’ と、腕をガチット組まれて小雪の降る中を隣りのクラブ・ハウスへ。

皆の拍手の中、メインテーブルに着席すると隣りは高等教育庁長官の Prof. Gunnar Brodin。このお二人にはさまれて、生涯忘れ難い、それは楽しい夕食会を10時過ぎまで楽しんだ。プロディン長官は、新築のスウェーデン大使館開所式の講演に行くので、東京で再会しようと約束されたが、今日4月5日にお目にかかった。

3月24日(日)スウェーデンを去るに際し、フセーン教授に、ご令室の病が重い最中にもかかわらず、何かとお世話いただいたことに御礼を申し上げようと電話を入れると、逆にアカデミーの一同に代って改めて貴君の素敵な講演に対し感謝したいといわれ感涙。そして改めて、いささかのスウェーデンの社会研究・また比較・国際教育学を専攻してよかったと感じた次第であった。

ONSDAG = WEDNESDAY

常磐大学教授 坂田 仁
Prof. Jin Sakata

英語では月を表すのに1月をJanuary、2月をFebruary..と呼んで日本のように数字を用いることはしない。ヨーロッパ諸国の呼び方もおおむねこれと同じで、発音・表記上の変化が多少のバリエーションを作っているに過ぎない。この各月の呼び方のなりたちを調べてみると面白いことがわかる。

まず英和辞典を引いてみると、次のようになる。

January	Month of Janus
February	Month of Expiation
March	Month of Mars
April	Month of Aprilis
May	Month of May(=Maius)
June	Month of Junius
July	Month of Julian(=Julius)
August	Month of Augustus
September	Seventh month
October	Eighth month
November	Ninth month
December	Tenth month

そして、古代の暦では3月を年始として計算したので9月以下は上記のようになっているのだと説明されている。

そこで、プルタークの英雄伝をみると、ヌマの伝記の中に次のような記述がある。ヌマというのは、ロムルス死後ローマを形成していた2つの部族(ローマ族とサービニィ族)の双方から尊敬され得る人物として、サービニィ族の中の声望のある者をローマ市民がローマの王に選んだことによって、王位についた人で、戦いよりも平和を欲した王であるとされる。この王はまた森林を逍遥し、女神と交わったとも伝えられている。ピュタゴラスの友人だったともいわれる。この王がロムルスの時代の暦法をかえたというのである。

ロムルスの時代の暦は、マルスの月(即ち3月)を第1番目の月として、その後10番まで順に番号を打ってあったという。(現在の1、2月は11番目、12番目の月だったらしいが、プルタークは1年が10月だったともいっている。)従って、今の12月はDecemberで、10番目である。ラテン語の

数詞は、unus、duo、tres、quatuor、quinque、sex、septem、octo、novem、decemであり、そのうちQuintilis、Sextilisは月の名前として現在のラテン語の辞書に出てくる。September以後も同様である。しかし、Quintilisは後にJuliusに捧げられ、またSextilisは2代目のカエサルであったAugustusに捧げられている。5月以前の3つの月については、3月は軍神Marsに捧げられて第1番目の月、第2番目の月はビーナスの別名であるアペーリス神に犠牲を捧げる月という意味でAprilisと呼ばれ、その1日には女達がmyrtus(天人花)の冠を戴いて水浴に行くことになっていたという。第3番目の月はマーイアの月としてMaiusと呼ばれていた。

以上の順番のMartiusの前にヌマは2つの月を置いたのである。そのひとつ、2月は浄めにちなんでいる。この月には死んだ人々に供え物をし、お祭りをを行うことになっている。februumはラテン語で浄め(purification)を意味し、februaは浄めの祭りを意味している。他のひとつ、1月はJanusにちなんでJanuariusが置かれた。プルタークは次のように述べている。「ヌマは、マルティウスがマルスの名をもっているので首位より移し、あらゆる場合に武力より政治力を重んじようとしたのだと思う。ヤヌスは非常に古い時代の、精であったか王であったか、政治的な社交的な人で、人間の生活を動物的な野蛮なところから変化させたといわれている。このために人々はこれを顔の2つあるものとして表現し、人間の生活を1つの形から別の形を与えたものとしている。」(岩波文庫版による。)このヤヌスの神殿はローマにあり、戦いの間は門を開き、平和の間は門を閉ざすならわしになっていた。ヌマの時代には43年間もこの門が開かれなかったといわれている。ヌマについてプルタークは次のように評している。「支配者の著しい模範と明らかな生活の中に徳性をみる者は、自ら進んで賢慮を懐き、正義心と節度を具えて自分達に友情と協和を以て接する人の立派な幸福な生活に化せられるようになり、ここにすべての国政の最も見事な目的があり、自分に

服する民にこの生活とこの心持を起こさせる力のある人こそ最も王たるにふさわしいものなのである。そうしてヌマは誰よりも先にこのことを心得ていたように見える。」

これらの月の名は、今はヨーロッパ全体にほぼ共通しているように見えるが、必ずしもそうとはいえないのである。たまたま私の目にとまったスウェーデンの暦では月の名が次のようになっている。

1月	Torsmånad	(トールの月)
2月	Göjemånad	(?)
3月	Vår månad	(春の月)
4月	Gråsmånad	(草の月)
5月	Blomstermånad	(花の月)
6月	Sommarmånad	(夏の月)
7月	Hömmånad	(乾草の月)
8月	Skörde månad	(収穫の月)
9月	Höst månad	(秋の月)
10月	Slakt månad	(屠殺の月)
11月	Vinter månad	(冬の月)
12月	Jul månad	(ユールの月)

日本語に訳すと味気ないが、言葉の感覚からすると、「むつき」、「きさらぎ」、「やよい」といった感じである。そして、そのそれぞれの月に歌がついていて、トールの月の歌は、「この月に、俺は肉をいぶす。ただ食い、酒を飲む。俺は自分の血を一滴も流したくない。この月に血を流しても何にもならないからだ。」となっている。ただし、この訳は私の勝手訳なので誤りがあると思う。以下2月以後のものもあるが、極めて難解で私の手には負えない。どなたかに本誌誌上で御教示、ご紹介を頂けると有難いと思う。

これらの古い月の名がキリスト教の伝来によって失われてラテン風になったのが、或いはラテン風の月の入ってきた後に判りやすい自国風の名前がついたのか、これも誰かに教えて頂ければと思う。

ところが、これが曜日の呼び方になると事態は一変する。ここにはゲルマン的な要素が色濃く残っているのである。英語、ドイツ語とともに示すと次のようになる。

	スウェーデン語	英語	ドイツ語
日曜日	Sönday	Sunday	Sontag
月曜日	Månday	Monday	Montag
火曜日	Tisday	Tuesday	Dienstag
水曜日	Onsday	Wednesday	Mitwoch
木曜日	Torsday	Thursday	Donnerstag

金曜日 Fredag Friday Freitag
土曜日 Lörday Saturday Sonnabend

日曜は太陽の日で月曜は月の日である。この2つには何もいうことはない。火曜日のTisdayは、ゲルマンの神Tyrの日である。テュールというのは、いわゆるアース神の中で最も勇気のある神とされている。フェンリル狼をわなにかけた時に自分の片手を狼の口の中に突っ込み、食いちぎられた話は有名である。つづいて、水曜日はオーディンの日である。オーディンはアース神の中の最高神で、万物の父である。軍の神であると同時に、知恵の神、詩の神である。ルーン文字の神でもある。英語のWednesdayとはオーディンの神の日(Wodanstag)が変化したものだという。スウェーデン語のOnsdagもこれに由来している。Wodanとはドイツ語でオーディンのことを指すといわれている。ところが、現在のドイツ語ではMitwoch(週の真中の日)とは何とも平凡な表現になっている。キリスト教の神にゲルマンの神が遠慮したのであろうか。木曜日はトールの日である。トールはゲルマンの強者である。オーディンとヨルズの子として神々の中では最も力が強く、2頭の山羊の引く車に乗って天空を駆け巡り、その時に岩は震え、亀裂を生じ、大地は車の下で燃えるという。雷である。トールは巨人達と戦い、神々と人間を巨人から守るのである。ドイツ語のDonnerはTorのことである。Thursdayも同じニュアンスをもっている。金曜日はFriggの日である。フリッグというのは、女神でオーディンの妻である。アース女神の第1位にある。人間の運命をよく知りながら沈黙を守るといふ。そして他の女神はその侍女であるという。その神の名をもった日、それが、Friday、Freitag、Fredagである。最後に土曜日であるが、バイキングはこの日を体を洗う日にしてほしい。実際にはバイキングは年に数回しか風呂に入らなかったといわれているらしいが、土曜日が洗うという意味をもっているのは面白いと思う。英語では、ローマの農耕の神Satturnの名を借り、ドイツ語では祭りの前の日といった感じである。

こうしてみると、ゲルマン語系統のことばの月の名はローマに由来し、曜日の名はローマ(或いはキリスト教)に遠慮しつつ、自らの伝統を守っているのだろうか。

(H 03-02-12. 家調協雑誌13号より1部訂正して転載。)

スウェーデン大使館竣工



新大使館庁舎



来日されたカールソン首相と
岡沢憲美当研究所常務理事

港区六本木にあるスウェーデン大使館の庁舎は昨年より新築工事が行われていたが、今春竣工した。

竣工式にはイングヴァル・カールソン首相が出席されたが、当研究所からは西村理事長、岡沢常務理事が出席して竣工を祝った。

新庁舎は、8階建てで、1～2階は大使館のオフィスで、3階には大使の公邸があり、4～8階は大使館の方々の宿舎等に当てられている。

地下には、プール、サウナ、アスレチックルーム、スカッシュルームなどがあり、全館が極めて機能的に出来ている。

スウェーデンに関心の深いわれわれにとって、新庁舎の偉容は大きな誇りであると共に、スウェーデンの諸事情を学ぶ上に、従来に増した便宜を与えていただけるものと期待する次第である。

研究会報告

政治問題研究会

去る3月27日、当研究所事務室にて、北海道東海大学教授武田龍夫氏の講話を中心に、最近のスウェーデンの外交についてと題した研究会が開かれた。

講話は対バルト三国と中東湾岸関係が中心で、バルト三国については、フィンランドを除いた北欧三国の所謂「北欧スタンス」は三国との連帯を重視し三国の独立を支持する姿勢を示し、北欧理事会も、国際会議で三国の独立を承認することを希望しており、中東湾岸については、スウェーデンは積極中立から、やや国際協調的中立主義に姿勢を変えた事情を説明され、今後わが国も自己主張外交への移行が必要であると述べられた。

<SIPニュース>

80年代の独身の増加をもたらした家庭の形成と解消

中央統計局のレポートによると、現代のスウェーデンのカップルの同棲と別れは1980年代以前の傾向とは全く異なってきており、これは家族構造の絶え間ない変化に起因するものであるという。「80年代の家庭の形成と解消」というタイトルがつけられた同局のレポートは結婚、離婚、同棲に関する統計に基づき、現代の生活様式を認識することに役立つといわれている。

スウェーデンでは毎年8万から9万の新しい家庭が形成される。1960年代には結婚件数が5万から6万件であったので、これは大幅な増加である。しかしながら、80年代に入ってから従来の法的な結婚は年間わずか4万件にすぎず、新しく形成される家庭の大多数は同棲にもとずいており、この傾向はとりわけ20-29歳の比較的若い年代層に多く見られる。結婚しているカップルの大半も同棲経験を有して

いるのが一般的である。

結婚数の落ち込みは新しく形成された同棲関係によってほぼ埋め合わされているものの、全体的には、これらの統計値で、独身数が増加し、家庭数が減っていることがわかる。

スウェーデンでは、1970年代半ば以降、離婚率が極めて高いが、同棲カップルの関係解消率はこれをさらに上回るといわれる。また、若年層カップル間及び年齢差のあるカップル間の関係が最も脆弱である。なお、遠い国々からの移民はたとえ、異なる伝統をもっている、一般的に同棲関係より正規の結婚を好む傾向にある。スウェーデン人と移民とのカップルには統計的にいって、文化的に均質のカップルに比べて、結婚もしくは同棲関係がうまくいく割合が低いということである。

毎年、約4万2,000人の子供達が家庭の崩壊を経験しており、このうち片親の死亡によるケースはわずかに3,000件にすぎない。しかしながら、スウェーデンの子供の80%は実の両親のいる家庭で生活している。
(SIP 016/91)

有害放出物の生態への影響を正確に指摘するコンピュータシステム

スウェーデンのウプサラ大学の堆積学者ラーシュ・ホーカンソン教授 (Professor Lars Hakanson) が、此の程、有害放出物の水環境の生態への影響に関する多量の相反する情報を理解するためのコンピュータシステムを開発した。同システムは環境保護庁の後援を得て開発されたもので、地方政府や州議会が複雑な環境問題に関する意志決定をする際の貴重な一助となるものと見られる。

解答を求められる基本的問題は特定の水環境(海、沿岸、湖、川)に特定の放出物がどんな生態上の影響を与えるか、ということである。ホーカンソン教授によれば、これを査定するには、同じ放出物でも環境が異なれば、異なった影響が生ずるため、あらゆる生態系を研究することが不可欠であるという。見当違いの環境上の決定による意外な結果の一例として、同教授は湖の水銀レベルを減じるために建造された浄化設備をあげている。重要な生態上の連関要素を見落としていたため、同装置の設備は完全に逆効果であったという。

ホーカンソン教授のコンピュータシステムは環境上有害な物質の特定の基本的要素並びに様々なタイプの水域におけるそれらの物質の多様な影響を取り扱おうとしている。同教授の研究過程においては、特定の要素が、他より統計的に重要であることが判明した。例えば、水銀の場合、そのレベルは魚の水銀濃度を測定することによって決定されるので、考慮すべき主要な要素は湖のペーハー値、放出量、生物生産量である。

酸性度と水銀中毒へのかかりやすさの間には重要な相関があり、ペーハー値が低い酸性の湖では、魚は比較的多くの水銀を吸収する。過度の肥沃化も影響があり、生物生産量が高い時には、多量の魚、藻類、プランクトンは水銀が大きな生物量に広がっており、それらがそれぞれ少量ずつ吸収されていることを意味している。

最も重要な連関要素は精密に示されるが、最終的結論は、特定の水環境への特定の物質の最も顕著な影響が明確に識別できる評価表として表わされる。なお、同チャートは適正な対策の案出にも役立つということである。

水銀、放射性セシウム、リンといった物質の評価表は、現在既につくられているが、他の物質に関するデータを同様のチャートで表わすことは比較的容易だといわれる。政治的意志決定のレベルでは、同コンピュータシステムは決定の環境の様相を即刻、正確に指摘すると共に、費用効果分析を促進する。同システムはまた、効果のない多数の改善策や、さらに悪い場合は「小難を逃れて大難に陥る」ような措置が講じられるのを防止するのに役立つということである。
(SIP 043/91)

正 誤

前号 (Vol. 23 No. 3) 2ページの左行下より4行目上智大学教授の次の(民事訴訟法)は、(民法)が正しいのでお詫びして訂正いたします。